竺志船物語旁註

下冊

へ13
3551
2

ぞ一日二日の舟路にも侍らばこそ、さもいはで
やすからめ。つくしまでハあまたの日数をも
すぐさでハいたりがたう侍れバ、そよりかね
あじめ海のへんをさだめいふべきことも侍れ
清舟出しときおそきハまで清くてろよまつさ
せなるべし。たとへ南風なくとも、かぢと
りのんでまかしこう侍らば、なまの浪にて
ろおきのかるる侍らんとて、うけがひける氣
しきなれバ、守まろこびて、つくしへ舟人ハ

かくのごとく（如此）なんまうしけるといへバ、師の君ゆるしたまひて、
さらバとて舟人どものまうしけるまゝにあまり
きこえんとて、皆おまへ（前）にめして、おも（面）てかしまろ（艦）
そのときよりゐざり（膝行）いでゝ、事のやう（様）をとひたまへバ、
かの舟人らまゆ（眉）うちひそめ（嚬）て、あな（甚）おそろし（恐）、
よく舟のりするものハ、目えり（撰）をして時うし（失）
なハざらんやうにするをこそ、たけ（長）たる舟の
をさとはいひ侍るなれ、たとへ舟人のかしこ（賢）く
こぎ侍りとも、ろかい（艪櫂）のちから（力）ハかぎりあり、

海のみちさやうかゞらハ、いかで波風をば
あなどり（侮）侍らんとて、いとあやしとおもへり、
猶その舟人ら（等）うちわらひて、あやふ（危）くおく（臆）しぬれ
人らこそ、波山をうご（揺）かし、風いはほ（巌）をとバ（飛）
すばかりに侍りとも、かぢとりえたるひとは
まで、波舟ハたゞひとつにある（在）べし、いで
こまもろこしハさらなり（勿論）、天のはてまでこぎよせ
なんとも、われらとも（供）もつかうまつらんにハ、
なおこゝろ侍らんとて、いとわれ（慢）ハがほなれバ、

是れ法為よおろかなるじとてかくハ中
なりがおくしきするハあらじとてなまなまれ
ものどもの色をなして師の君せうしなひてなかなか
そひそいでおのおのことありがいつれをおろ
かなりともいひがたしこれいまだしらずして
ろよそむくとのたまひてつくし汝等をバ
こゞろのりなれんれうまとゞめおひてこと
まちかうしうつのうまつれるかぎりをみを
のこしておほくの法ともハ皆なよハの

舟まてまたぐでうしめなよふかくやすらひ
なるをば守よろこぶ事かぎりなし月ハ秋
ごとにすこはきれぞ浮ぐもいでゝよもみけ
しきさえんやりなる空ハ塵ゞのりの雲もあつまれば
あハちおほくてきまとるがやうにて海の
おもてはみなさらの波たゝざる時てこがね
れぶすまにしきたるんやうなりいのくさの
法車なる小松どもおほかる中にこぞて下
すだれほのかなるよこのけるひ是ハ禄身よ法

るとゞめあひて、ぜんざう(軟障)引まはして、
かりのおまし(御座)しつらひ(造)て居なるは守まう
けの物(荷)どもはこびいで(出)て、へいじ(瓶子)とりながら、
ふりよしるども、かはりいづゝもし物を
のゆ綱とれば、もしほ(藻塩)たれ(垂)つゝとわび(託)あひ
なるすまの浦は、この関のあるさまてより
さこぞなひわたる(渡)計ちかき(近)ほどに、又た
をのゝたかむら(小野篁)宰相おれば、しまのくれゆくとよを
漕くるは、やがて此うらに舟とゞめあへるをり

けるよなんどうは此ぬしたちのなごりわきて
わすれず、あまのさへづり(海人語)ともそれこその葉をばいひ
傳へて侍るさればおほやけのかしこまり
ありて時うしなへる人々なれば、せまさほう
へてあはれなるためしまこそ、いひいでゝ侍れ、
それよりうへてせきいで(出)ばあひあひて、
此身のひのりそひあへるたよりまかく(逢)やすら(逗)
ひあへば、そよりして、あまれ(海人)子も君をこそ
此浦のめいぼく(面目)まへいひ侍へきあととへば、

いそのでらの名ある人これつらねハなぞらへ（列）（准）
侍らんてらびきさのえてらびハおとろふるを（栄）（衰）
これ春秋ありと花けバ世れうきしづミハ（浮）（沈）
いふべくもなしんバさてもちやらぬ人これ
名こそ朽ちもせしはれこよひうくまことく（朽）（真）（人）
我と此なぎさの月よながされ侍るもすさり（浮）（宕）（去）
世うつりなバおなじむかしがたりとこそ（移）
なり侍らめ
あはれしがし月と昔のこゝろとてしらぬ世（記念）

ま今やしのびがつらんとのあへバげに名おし
とゞめん浦ミの月をバこの世まのうきす紙
侍らん
此青しも浦まれ身をんして光を
なるまゝかぐらぞつんる亦がうとのこゝろえ
こそおぼえ侍らねといへ清車よりもまさらふ（童）
していふせなし
沖つ舟とるやまのおちれ数さへもさや
このよふ申る秋のよの月

もしほやくけぶりもたえだえなりゆくは
浦辺(邊)はあまも月やめづらん、須磨はあと(後)なる
はまべちなど(等)れもありつらんを、笑もしさ
れば、いそれ、夏のまつよ月はいよ〳〵すみて、
さればさたびくめぐれば、君はときたまきよう(興)じ
給ひて、家園忘却して、とおず(誦)して、例の
たえのり(無量)なきのみ(飲)のふさぶらふ(侍)人〳〵は、君は
はこの(對)うきこなるづうりのみ(飲)えん(得)人〳〵もなければ、
よるさ(困)ひこうじて、松陰宕にもたれかゝより(靠)

ふせる(伏)を、君見たまひて、いつもつひなきものども
これ、よくぞ(謹)やある、此杯にこそまらうどのあへどは
こゝろへ笑ゆる人もあれば、うちうちとひまひ
て、山(樵夫)のあま(海士)人なりとも、さよひまなまらるゑ
ぞてあらん、酒よりけうらんものあらば、よく(疾)
まゐ(参来)りてよとのたまへば、守も(健)ゑひつゝいるが、か
くの給ふをきゝて、いとのではんなとこんとて、
かしこもこゝげなど、あまんまいりでゝこゝより
つゞけ此舟人どもの侍るをめしいでゝ、此杯

こまつりがいのまといへば、いとよろしんなりとて（好有）
めしたる舟人どもおもしろきのなるすなごのあまは（沙）
うづくまるを、守まちとりて、此舟人どもは（召）
いとめづらしきなるあざれの侍るを、名づき（字）
ふるつすれよしきこしめして、清様にまいらば（負）
きようあるつらざまこそ侍らめといふ、あや（興有事）（奇）
れことや、いかなる名ぞとのたまへば、守あいと
よくぞかしこまりておまへにいでて、ふけだ（丈立）
ちふとくて、ふつつかにこえてあり、ゑいをとしれ（太肥）（雄）

さればとてりんなみこれなん力あるなす人は
すぐれ侍る、千引の岩をも、石なげとりの石（千人引之石）（石投取）
とる計よとりなし侍れば、さもなん人のよび（然）
侍るとくば、めざましきちからありとて清様（眼冷）（力）
にまいるつぎよいで来るは、やせほそりてかさ（痩）
ちひさく、やさのかりこそ、さやものなるものこま（小）（此）（小）
きあるは、身の骨いとやはらかのまでいささの（柔）
なるものくひまよりもいでぬるすんのあまな（間）
れば、いたちまろとくりかぶち目はめあかく、（鼬鼠麿）（眼赤）

からすはぎ（烏脛）ハはぎ黒し、むねのさしいでゝあれバ、
鳩むねといひ、うしろ尻とがり（尖）たるをほこづら（鉾頭）
といふ、皆つぎ〳〵（次々）におまへはいづれ君が店法さき
さるよしを笑ひあひて、いとめづらしきことなる
ものどもられ、まろうどさま（徃）はいましらんとて
つまどもかくきよう（興）なるものども（等）をおも
ひもかけざりしとて、わらひあへ皆いたく（甚）
酒のみまで（唯）のまゝはめ、君も法けしと
きそひ（競）あへど、よひ（初夜）より法杯の数つもりたる

後なれバ、えんやハしくおもいんといつしかと法こゑ（聲）
づかひのあやめもわかねず、さらぬさへ法んに
堪へせず（不堪）なりて（理）、ぐびひされるのやうにぞみえん
えのみ、君もいと（蛭子）くて、法風ひやかなれ（起居）
いでこそり、君ハねむたげなりふしたくるを、かく
るはおほとのごもり（御寝）んいとびん（便）なしとて、
守ハんぐるしうおもふまゝかくおひふしたひ
ゆきもなひて、法車よりおりたる人とも
まくバ、さぶらふ人ともおきてゐでいざ（率）とて

いだき(抱)てかきおこし(掻)まゐらせんとすれど
かくぞ侍るにまろび(轉)ぬ。ひとのくすりをとり侍り
こゝかしこの守もまどひ(惑)て、いかにせんのかなし
そのまゝにまゐらせんとおもへり。かゝる法ありさゝめど、
みづからのしるしありけるにまうでて、法身にちかう
なれ(馴)つかうまつりしに、いとしるしありけれど、われら
うつし(移)まゐらせんやといふ。守きゝて、かゝる時に
まかせたてまつらんといへば、みづからまうし
めぐて法花をねながしこのころまさげて

法華よみたてまつる。君はねさせ給ふにおぼしも
さるにや、やがて小君は法師のひざ(膝)をまくらにして、
法師は八十文字(もじ)ばかりのどろ/\しきこゑにて法師いびき(鼾)
のこゑぞ、法華のおとともに(共)たかく(高)とゞろ
きて、まくらとひぬ。舟人どもはうちふし(臥)
たるまに、みづから法華をよみもてゆくほどに
夜もふけぬ。そらもくもりて月さしいりぬれば、
姫君をほのかに見まゐらせて、こゝろうちよわく
るかたち(容貌)も人にはみえずおぼつかなくなるよと思ふの

むかりおかひらかばこそおもかげはこゝち
そぞろにして、ひとりいねもやられず、まさ（隨心）（裏）
も見ぬほどうのことおぼえて、さしかゝる人
をはまづこのば、いのちをもをしまず、
などおもひつゞけるに、たゞすこしひたるぬ身（准）
は猶をもしらぬ、よくきこころなりや、目ごろ（惡）
ゆきてぞちなる雲風もおさまりて、波（景色）
はなちゐもおだやかなれば、今はとてくだりぬ、（穏）
守は舟路の清まうけなるべき身のなかのくれ

ところにして、大きやかなる壺十あまりは
よき酒どもみてゝまゐらせたり、海のおもて（盈）
たひらかにて、風さらに出来ねば、清舟いと
おそし、六日ばかりへて、やうやくうまどまりに入れし（遲）（經）
も、追風吹いでん日をまちて、清舟は
いださめとぞ、舟人どもいひとりおこして（錠）
こゝはやすくくらげは海山のぞきもきのふ（賓）（休）
まゝ一の木もてそろへてなんもなく、さ
おれづくまぎるべきなれどもはつるをはかれて（曲）

おぼし本意なければ、君を清んじてうたひて、琴と
歌とふたつをも出給はざりしかば、今ひとつの友を
のみかはす人とぞなしたまふとや。つらし
此舟人どもは、もと純友がみかどをかたぶけん
とし給ふこゝろをあはせて、このともがら此
すみかのよ年ごろ志ふかひありけるが、純友
からめられて後は、民などの人名をかへて、
かくれ志のびたるを、さらに志る人もなきの里
なれば、舟人となりて世にありふるなり

なりさがるはみなぬす人のひさぶるごころ
もあれど、清いきほひいとめしくいひの志
まさる帥乃清舟出なければ、おごそかなるは世を
このろめしるふるまひなど思ひもかけざり
しかど、あまつさへ此清しも人をさきてせめひ
て、そは清舟にさぶらふ人をも殺おほかれば
君をおまこひぢのやうにのみおもひすれば、
おのばうあなづりかろめおもひなりて、
志のびしにあひかまひたるは、純友こころ

ざしとげて、関白などいふんせうをもはう
ましらば、わがのこゝろざし（遂）たとへおひくとも、
受限よりかくぶてござこましをと、あへなくは（不可下）（無敢）
うしなふ舩ばとて、かくろふひとるわざよ身（艪櫂）（業）
をしづめそれぞれてちをしられ、かゝらん
よりは、ぬきて人とて人よめをそだめらると
も、宮ぶりはなましらば、まさんゆくよぢち
なぞらなりらん、皆わひふしさらん時をと
まちて、物してんやなどいひあへり、師乃（合）

君は此舟人どもに、のくむくつゝきんあり（狡）
とおもおぼしもよくぬすなれば、はんなきと
けてのとるしまへり、一日ひねもすのごく
らしまひて、さもよくくも皆いとく恙
ひてよろひよりうちふしてる様なれど、
舟人どもてよろひこそといへど、おもくび
うちかくぶけて、かれこゝろひふしされども、
ひやうぢやう（兵仗）おほくぐ（具）しされば、おきいでん
人あらんは、いとあやふし（危）、志のびいりてあ

せんぎハ戸口かたのこより（彼方）さしかため（固）て
鼬ぞいふのでせんとてわづらふをいたちまろ（鼬鼠麿）
笑てゐれすゝやうありとて水ぐり（慢）わき（傍）によ
ほそき窓あきてあるをとみておきてねざまひ
入て舎人（とねり）随分（ずゐぶん）らがねて（寝）ゐるこのまゆきて
よせ（寄）たて（立）ある（有）弓弦皆きりかた（方）はなち（放）て太刀
どもうばひとりてつま戸おしひらきていで
きまぬ（嚢）かくてはんやすし岩をたれバ人も
こそしれとて鼬のくるをまちていのり

とりそれもちて二の人の急陰よりてぎぎのおする
を舟こそり（拳）て志れ人めのりなりすり
人をまむひてありとはらん人ハ皆ころ（殺）
しつべしさらず（不然）ハ後のおそれありんさて
宮をわらちもんことかくてハおとり（劣）ま（互）優
さりきあるべからず（不可令有）とて姫君をバわれよ
ねさせよなうしなひ（怒失）まゐらせそといふぞ
そハ法んまでなりとて皆うなづき（諾）ぬ汝風
さとはいれバ（颯入）年をへる舎人（とねり）のいぎとくちが（寝疾覚）

ふとおどろきて、あやしやはま戸のなる
いそてたちいづるを、まちうけて、かのやつ
おとなへてさせそとゞめ、かぶちめころにて、
たちぬきをもちてきれば、のけざまにたふれ
ぬ。此おとに皆めさまして海賊こそ来さ
なれとて、ねおびれながら立さはぎて、矢
をはなさんとすれば弓絃皆なかたえて、太刀
をぬかんとても、さやさゝれ、ひとつだにな
ければ、せんかたなくて、ふなぞこをつたひて

にげんとするを、皆きりすてければ、海におちゆく。ごたち
なきまどひて、海賊いり来て、法師ども皆
きられ侍りぬ。うへにあがらんとて、そこ
くが、おどろきておき出たれば、舟人まで
みだれ入て、ごたちも皆きられ、かの師の君
太刀ぬきあはんとすれば、かゝすそぎはしを
つよくとりて、かたへにおしよせまろばするを
ふりはなさんとすまひ、まへどえやらでみ
じろきもせでまつらん。やがておしまどり

ものはうしろでにしばりつけまゐらせて。
姫君をもかたへにはなちおきぬ。わか君はおぢ
おそれたまひて小方が法神にかくれたまふをはた
とねひぢかたへぐりよせて、はくびをつよくにぎ
すばやく、いきはたえなんとす。小方こゑをたてゝなく
しなひて、わがもてる宝をさゝげはんにまかす
べし、いのちひとつは家にかへさせたまへ。あが佛
あがほとけとのたまへば、はちがしらうちわら
ひて、法師いふはさもさなり。法いのちもたす

かくてやいばとて太刀うちふるふとみえしが。
あなやとのゝしるこゑとゝもに法師はむくろふたつにさ
つにたをれけり。師の君なにごとぞとうけて、姫君
をとりおこせたまひて、さきに父君の法
つげありしは、かゝるの法さとしなりし
を、まのあたりにおもひしらるゝぞ。又あがこいさ
めにもしたがはずして、かくよこさまなる波風
に家のうちこぞりていのちをきはむること。
みなわがあやまりぞといふのせちなりと

もれさごの里の花をさへがんとていきづきつくる(嘆息)
さるひといふもの里よりてあなやく
わきくりことよとく(甚)わたつみの(海神)あまままうで
よとて(無)おぼしまより引きたちて(疾)は夜の(領)く
びいてつきて沖のこのまとほくなげ
やれば波ごぼとなりて(鳴)はずべきもれたち
あえにあはれ岩のはしとゞはよまん世には
むしまるもとのるひわたりしをぞ絶
まへあるでそれ世たながるみなそこ(水底)れいろ(鱗)

くげところそなかるひよされ、姫君はこのあり
さまをみんのひて、せんしかなきさめみざこんはき
まへく死なんとおぼして(耻)、ちかひては身を(目)
ふりをあちかへば、法師ほころびてはまくつ
ろぎぬ、やがてはなをすべし(脱)いそぐはすのつ(寛)
まて身をなげ(投)給んとするをおさへやく
かきいだき(抱)てとゞめまゐらすれば、むねん(無念)なり
さなふれ(勿触)そ、とく(疾)これをころせ(殺)とて、なげなふ(泣)
手を引はせたなきをうちなで(撫)なくはんしばらく(静)

なく君をバいそぎてうしなひたてまつらんこゝろ
ありてかくおしとゞめまゐらするなりといへども
たてんなきぬまでとゞむとよかくてしばしもうけ
とゞむべきいのちならずとていまひとひあらんとする
をばさらにおしとゞめまゐらせてあなかしこ
さやまゐらせあふまじとざまにもかくざまは
もはやこゝろえまゐらせてつかはしめとて
はしまおよびさしあてゝまもりをればせん
このみかしこまれまゐるはなかなかへあらんハおぼろ

りしきものゝいのちきえなんことかたき
しやとてはなれうちにはいのちはかりて
このかれがめをぬすまひてとくしなんとおもひ
つゞけぬるにはけてまさおぼしめぐらさせてと
ぞわれさへ世になからんにハかくよこさまな
るわざに家こぞりてうせぬとあれバかし
らんあらましきわたつみいかりにあひ
ておぼゝれになりとのこせし人のいひてや
やみなんかくいみじきあたかたきをおき

てうらみはてさぶらんとあるべうもさぶらはねども
為にむくいせざらんすることいとおもし、みさを
をけがしの身にはぢおはんも、つみとりては殆からう
かろきことのさほどやいのちをすてなんことおそかれ
とねがしなりて、なきこおしぬぐひてさ
らばわれしぬまじ、なぞやわれをころさず
とはおのれぞとのたまへば、手よろこびて皆人
もまことさらばらんとてこそ、しきりにおこし
侍れ、われは君をほさてまつらんためにも、

こゝろをとくべきなることとて、やがてかきいだ
きて几帳のうちにいるゝを、はこゝろをぞよせたて
まつらず、しひてこゝろをおさへはひて、わり
なくはらをまもせのみはこゝろのうちにいくの
びりこのありぞん、さるは薪のなくぶく花乃
枝よりもうるそぞおぼゆるや、いとわまろ
くゝまもらひてかれ見るなく、ことおもひは角むれ
妻よばひのふたりめなるを、いとのぞらいはひ
ぶくもせでさぶまあらんとて、人をはぢらうちわる

ひてげにさゝるゝなりとて、みなうちのけがの
しきものどもかきはらひて、あまされ酒盃
どもとりいでゝ、れいのゑひのしれ、ほこが
しらこゑうちひそめて、人ゝふそのなゑひ
かしらそ、おところおくべきことあり、姫君今
ゐ舟ものゝころよ従ひおつやうなれも、
いそのでいはこされん、なんなんおもあけゆきて、
人めうんえなんまゝにのれこだてゑてかひ
ぬべし、もしさもあらん時が学つゞくおほく

いり来て、とひうかゞへなまゞのがるべきことば
なうらん、此のことをはすも、すゝめをすゝめ
種なのこいそといふまるあらばやと人ゞ皆
さもあることよとて、此妹のもとよりまで
人がこわばゐるを、手引ころねていでまし
ぬべ、そのくなんおもとへくさゝやきいんだ、
手引うなづきてわれあやまてり、今ゝしく
いまゝされはんやまそろしめんとて、たかぬき
もちてまつ此妹れうちよ入来、姫君ゝる

まうりがありさまをみんなひでさへつされどころ
すがりなり、（形勢）いのちをしなん（死）ずるは、露のいのちをし（惜）からね
ねども、かたき報（報）はむくいもせで、身を
いたづらになしはつることよと、くちをしうも
かなしうも、はんせき（塞）あへず、さくり（歔欷）うそ
よゝとなき（泣）ゐたり。涙はそぼち（濡）たるかほ（顔）のはの
にほひ（色）の、消おるゝほかげ（火影）にもてはやさ（賞）れて、
いとゞえん（艶）になまめかし（媚）き、いきとら（虎）
おほかみ（狼）もち（持）えんとも、え（得）てもあらぶ（荒）る

まじきさまのしなへるをだに、すがり（貌）みゆるまでに
らうたき（労）そのさまなりて、おもひ（憂）たゞりしをも
わすれ（忘）、たけき（猂）心も、なよび（婀娜）ゆきて、なほおそ（恐）
れのひそ、君をばいつでうとて、たち（太刀）うちおき
てまくら、かいだき（搔抱）てね（寝）ぬ。舟人どもは、姫君
をうしなひまゐらすることとて、まつ（待）に、
よるさりいで来ず、磯や（家）のおと（音）のねたる
このま笑えて、誰もたちやあけなんとすれど、
はるつきじろひ（屏語）、いつやうなるをとしる（慕）ひなるに

まどふらん、舟ちがへのわかれゆくんぞうらを
まよへば（迷）、皆人いかなる浪にあひてか
ひろはれ（尋）底にしづみてんもありがたし、
舟ちかへておもひやらるなる身をとりんはさむぞ、
さしも梅（うめ）なくとおもふらん、わがともがら（輩）なる
のすてがたきゆかり（縁）までもあはれともいかなき（辛苦）
めをぞみん、いざおのおの（各）たからども（寶）やかち
とりて、許多（こゝら）とこそかくさめとて、こちらとも
ならべ（並）からびつ（唐櫃）、ながびつ（長櫃）、なにくれ（何是）の調（でう）

度（ど）ども、皆ひきつりいでゝ、まさごによりえり（撰）う
ごひて、ゆくへ（行方）もちぎり（契）まゐらせぬ、よりきたるは
ねよふとおどろかされて、かくいひしらぬ（不堪言）身
ぶちわれさめがたき（難）にかゝづらひて、かくは（心裏）（覚）（關）
うつりぬる身を舟人どもいかに思ふらんと
おもへど、あれがち（強）にあらか（荒）にとりなしそ
まつらんこゝえもおもひのけぞ、させばおもひ
まづらひなるが、さらいへられいさめ（諫）しらぐく、
嫁夫は、ほとゝろの底いとのでうちたるべき（知）ぞまさ

身はもはやひき出んとすべし。めのまへにあ
秘ばよしこれまでのえにしにこそありけれ。
今はおよばぬ本意かなひぬるを思ひで
ましてふ後のおそれあらせじとはよくおもひ
なりて、ぢこれをなうらみそなひそ。我はかくて
長く冥土へまゐらんと思ひ侍れど、母人
どもさこそうけ引侍らじ。さるを志ひて
さすけまゐらせほとも、人にいとそでふたぐまあ
らせそてまつらん。あなかし人のまうさあ

みまからんよりは、われこそこんぱくとなりて行かん方へ
はてさてまつらめ。あなかしこ何とぞ佛念じまゐ人
とて、法華経のかたはしを引きさりて、かうべを
わたなぎてつよくひけば、すわやちぎれてはなひ
ぬ。経まんかるるがなし。とては糸おし
ひきさいていでて見るに、母人一人だに
あらで、ちやうをちなちらふうちこぼち
たるものども、らうがはしくあらしちら
まぎらかして、かはわれをいふいひなしと

思ひてはなすてゝゐるまゝなりけれどいかゞはせん、（離）
物とりおろしゐる實もぞあるとてあさ（有乎 索）
ぐりみれど、さらに物一つだになし、纔
につめるものくずぞ、ひつの底にのこりお（褁物 櫃）
けるがあるをとりてみれば布なり、これは
るいだいの寶とはなるもあんなりとて（累代 為 有）
いふめるもしよれ岸の思ひなるべき、思ひ
がけぬあたひをえてうべなれとおもひて、（價 得）
ふところにおしくゝみて、やがてこのしぶりた（懐 押包 戕牁振）

ゐるかのへりのともづなきりはなちてさし（邊 纜 切 放）
もはてしやかなたなる舟を、ちかくよせのぎりに沖
のかたにおしやりければ、舟は波にたゞよひ出づ（押遣 漂 出）
るを、かへりみでさらにせで、あしとくあゆみて（顧 足疾 歩）
爲にかひし、てにげさりぬ。このくてこれ（傳 逃）
うきふねはゆくへいづちありけん、しらず（浮舟 行方）
つぎこれ其手にこそ。

つれ〳〵なる浦宮のうきねにまかならは
来たりし給ひしはうことゝもれ侍し
ことよろつのつみおきなひしも父のい
ま給ひし世には旅うちひなとも
し給ひつれ今まで弟なき人なり
なけかれまても悲しきのしけゝる雲れなと
おとゝのこなたの理もてゆく哉かゝてはこは
いかにしてかゝはりしたくもなるよつゝてはの

一毫をも見ゆるさゞる清哉かしこそ
とる由も清ぬし万一も未ましてこハ大人
の俳諧ハさらにこそあなかれのくせる
わりなうしき諺なかりし事も満こはる
かうしにはうしろ出免も清ひ念んもれ
をいの下の物の底よりえくらしたて
頭りん極よ免りて人をかも免せまゐ
しは栽きもわかせらむおめぐしかよきらに

まつらひなむと物ちゆいはれしかうれし
しよまれもふえのつかるあもとこと
をはくおとしなにもれせんハ人まへく
やなとわらくやにらハりさ出ぬしまる
しえ子れのみ父のすとにうるりう
なかれむはハれてむれ亀そてなかう北ん
物しのハ今ハきを裡よそあしうやいそて
かの出にそとなかしれて筆れまつにまひ

さくおはつかなかきとすゝの下にまねら
せられしまでとかう巻へかな清めてかく
まつこそれきさうれしよたの筆
文化のとし[illegible]理一と移ち[illegible]
むら田丸寺きを子

津くし二柱の松丸の筆
昔をえらむ小楷と草書を残[illegible]の家楷も
我くし我草ハとく[illegible]理[illegible]後まへる
[illegible]の草をえ[illegible]楷[illegible]の
[illegible]人[illegible]
中国[illegible]人乃[illegible]
[illegible]
[illegible]国乃[illegible]
[illegible]すんの[illegible]

古風と独り其詩中の義無きハ詩筆に依て
かしこくも詩を事にせしをかなしく二律形して今
萬葉より世に及び歌の道の世にハ廃れ後世
先づ此を見るの好き風詞にまかせ其新しき
から其世之宗とせ宇目に歌を律をなすところ古
出来る後は心にも多く歌を成すところなりて筆
詩を学ぶ者にハ其の俗語にて歌を
此律を作る物事物語にてよみ其の理にあて
見つ古来より作者此度にありけり

さとをかしこの一婦をと律を前あるハ親故に字
詩せしるを能ふ何事も考ふる歌人の其家
其をしたる風ハ校異を読人と共に詩情をも
律をも不書にて事の詞ハ不及学詩の其意
詩趣のこん先つ思ひしに三律の心無き大なる
人の世詩に用ゐて詩文歌に来る風をもみ
よ紀物語に詩をかき世の歌にも詩ふ次の
先の何をか考ふ心に家の人にたてうるわ
此事とく律をかきつし律歌をよむの語らく

何事不八ならぬ記せるは此ほとりに流るゝ世に
名を得し人多かりしが程く書友松の印乃あ
翁の水法学びの人々思ひ付しか見え為
下りかたく人澤之学びさま[illegible]く板にうつし家
都の芸の家に於て家たしく為そこはるまゝにも
毎[illegible]りかくて年来殊に文化とはかくし
好事く千と数あまり一と其の其技すまる家
る月好しとめ試みし今浮の家くの日
まま教の手辭しるす

題辭

錦翁元是錦為腸寫
出悲歡多一場誰讀遺
篇洪遺恨親仇未報
此肩三
白石灘頭夜色姸琢

中好佳月明時何閑
一陣狂風起倒岸波
瀾来打船
酒徒為病無生事此
前出篇真酒義示
為女児雙涙下流来

我二醉沈々
文化甲戌初夏詩佛
老人　大窪行書於玉池
精舎

俳諧歌論　松屋高田先生著　前後編二十巻

前編十巻。分テ第三巻ヲ為ス上中下三本ト。
後編十巻。共ニ二十二冊矣。一二之巻
文化九年刻ス。三之巻三本ハ今茲刻ス。
文化十一年歳次甲戌春二月

江戸梓行　須原屋茂兵衛

書林　京都　勝村治右衛門

大坂　大野木市兵衛